

ベリーシヨート賞

先取りノスタルジア 千陽葵



読んでいるはずの英文が何一つ頭に入ることなく抜け落ちていく。英単語がアルファベットにまで分解され、解読されないよう私に反抗しているようだ。

体の先端部から体温が奪われ、ペンを持つ手が思うように動かなくなっていた。ペンを持つていない方の指先でそつとほほをなでると、そつとする冷たさを感じた。きつと頭にも血が巡ってないだろう。

全ては放課後ストープが付けられない教室が悪いのだ。仮にも進学校なのに、室内でコートを着たまま勉強しなきゃいけないなんて、絶対おかしい。理不尽だ。受験生に対する嫌がらせだ。言ったところでどうにもならない愚痴を吐き出す。本当に責めるべき対象は自習室の席取りに失敗した自分なのだが、ちなみに環境のよくない教室には私しかいなかった。

やつてられないとシャーペンシルを投げだそうとした時、窓の外に広がる夕焼けに気づいた。その橙色に惹かれるように、私はペランダに吸い寄せられた。

外はもつと寒かった。温度差に体を震わしていると、冷たい風が正面から吹いてきた。私は羽織っていただけだったコートのボタンをしっかりと留めた。少しだけ外に出たことを後悔す

る。

冬の空を見ると私は水晶を思い出す。古い師が未来を覗くために使う、大きくて丸い水晶玉。ひんやりとした感触、石の中に広がる世界の透明感。あれこそ、目の前の空を形容するのにぴったりだろう。

主成分は二酸化ケイ素。共有結合の結晶で、四面体構造だ。余計な知識まで思い出してしまうのは受験生の性だ。

校庭ではサッカー部が寒さをものともせず、半袖姿でボールを追いかけてまわっていた。どうかその元気を分けて欲しい。

時計の短針はまだ四時を指したばかりなのに、太陽は本日最後の光を振り絞って、西の空を橙色に染め上げている。今日は雲が多い。もう半刻もすればそれは紺色に変わり、サッカー部の練習風景は見えなくなるだろう。

夕暮れには切なさが付き纏う。ぎゅつと体の中で一番柔らかい部分を握られるような、心の奥底にある寂しさを呼び覚ます、そんな効果だ。だからこそ古代から人はその美しさに魅了されるのかもしれない。

幾重にも折れたたんで、更に嘘で包み込んで道端に捨てたはずの、私の悩みも暴かれてしまう。考えても意味のないことな

のに、やっぱり気にしてしまう。割り切っているつもりなんだけれどな。

勉強がはかどらないのは、本当は寒さのせいではないことぐらいい、一番自分が痛感している。私は、馬鹿だ。

自嘲しながら再び空を見上げると、ふいに既視感に襲われた。

私は、前にも今と同じように校庭と空をペランダで何かを考えていたことがある。ずっと昔のことかもしれないし、つい最近のことのようにも感じられる。いつだっけ？ 長考するよりも前に、答えは案外早くに出た。

ああ、あれは中学生の時のことだ。そこから見えた校庭は、当時の私を取り巻く世界と同じように一回り小さくて、でもずっと眩しかった。

私はどこにも視点を合わせずに、ぼんやりと景色を眺める。だんだんとすべての輪郭が崩れて、ぴんぼけした写真のような世界にほうり込まれた。

頬を撫でる風が柔らかい。私の未来を祝福するみたいだ。

その例えは誇張表現かもしれないが、今の私には本当にそう感じられた。

校庭の梅の蕾がふつくらと薄紅色に染まっているのも、空に綿飴のようにふんわりとした雲がいくつも浮かんでいるのも、吹奏楽部の「三月九日」の演奏も、何もかもが私に声なきメッセージを送っているようだ。

私はペランダで春の気配を満喫していた。この景色を見るのも今日で最後かと思うと自然と口角が上がってくる。明日は卒業式だ。私はこの日を待ち望んでいた。

再び頭上を見上げると、飛行機がゆったりと空を横断して白い跡を残していた。やっぱり世界は私の未来を祝福しているようだ。

その反面私の心は晴れやかではなかった。上を向いていないと、胸の奥から熱いものが込み上げてきそう。嬉しさの正反対に位置する何かが、影のように足元にまとわりつく。

その時ドアを開く音が耳に入った。だんだん規則的な足音が近づいてくる。

「おい、下校時刻過ぎてるぞ。早く家帰れ。そんで勉強しろ」

予想通り。後ろから聞こえてきたのは、担任の間延びした声だった。きつといつも身に纏っているくたびれた白衣と、無造作な髪型と、それらと同じくらいやる気のない様相をしているんだらう。

「やだなあ。受験は先週終わりましたよ。もう勉強なんかしたくないです」

私は振り返りもせず言い返した。

「何言ってるんだ。受験勉強が勉強のすべてじゃないぞ」

珍しくまともなことを言う先生。そういう柄じゃなくせにと、声に出さずに毒を吐いてみる。

「おーいシカトですかー？」

クスクスと忍び笑いが聞こえる。

「そんなに卒業が寂しいのか？」

さつきより低くなった声に、不覚にも私は肩を不自然につりあげてしまった。どうしてこの人は、こんな時だけ鋭いんだろう。

「あれ？ 凶星だった」

私はやつと先生の方を向いた。

「あのね、先生。私早く卒業したかったですよ。私この学校嫌いなんです。授業も部活も制服も給食も頭固い先生も嫌い。あつ、そこまで先生は嫌いじゃないです」

「それは光栄だ」

全然そうとは思っていないような棒読み具合で先生は呟く。

「怒られたくないし、グれる度胸もないからおとなしく校則守っていますけどね」

何で先生にこんなこと言っているんだろう。感傷的に話す一方で、私は冷静に自分を見つめていた。問題児が多かったクラスで比較的模範的な生徒だった私は、先生とまともに話した回数なんて両手で間に合うほどしかない。だけれど、意思に反して口が勝手に動く。

そこで、私は一旦深呼吸をした。震える声をごまかし冷静を装って。さりげない仕種で目元を軽く拭ってから振り返る。すると先生は無表情で私を見つめていた。二人の視線が交わる。相変わらず死んだような目をしている。

「でも、何故か寂しいんです。卒業したくない、わけじゃない

んですけど、むしろすごくしたいんですけど、ざまあみろって感じなんですけど」

早く卒業したいって思えば、本当だ。窮屈な制服を脱ぎ捨てる日を指折り数えてきた。スカートやスカートの長さを気にしなくてすむ。靴の色に文句を言われることもない。持ち物検査もされない。私をがんじがらめにしていた強く透明な糸は明日断ち切られる。拘束されるものがなくなったら、きつとどこへだつて飛んでいける。でも、それを抵抗する自分の存在に私は気づいてしまった。

明日、決められた仕種で卒業証書をうやうやしく受け取って、有り難くもない話を聞き、定番のお涙頂戴な卒業ソングを歌う。全てが終わって校門を出た時、手元に残るのは一枚の白い紙だけだ。私の三年間はいとも簡単に纏められてしまう。

うまく言えないが、それは違う気がしたのだ。

絵に書いたように平凡な日々だったけれど、綺麗な言葉で飾られるために三年間過ごしたわけじゃない。

しかし、気づいたときには、背反する感情に挟み撃ちされて身動きが取れなくなっていた。表現しようとするばするほど、言の葉同士がぶつかり合って、何一つ形にならずに消えていく。それでも無意識のうちに誰かに聞いてもらいたかったのかもしれない。

「いったーいー」

いきなり頭に衝撃を感じた。つむじの周辺が脈打っている感

触が気持ち悪い。

何が起きたのかわからず、先生のことを見上げていたら、間抜けな顔でニヤつきながら私を見ていた。

その時やつと先生が手にしていたクラス名簿で私の頭を叩いたのだとわかった。

「いきなり何するんですか！ 暴力反対！」

「ごめんごめん、手が滑った」

「受験生の前で滑ったとか、言わないでください！ まだ結果出てないんですよ！」

「……お前怒るポイントずれてないか？」

「そんなことないです！ 落ちる滑るは忌み言葉ですよ」

「まあいいや。卒業前にセンチメンタルになっちゃって。お前今、嫌いな奴ほどいい人に見えちゃうだろ？ 困ったもんだ。まあ、あれだあれ」

「あれなんかじゃわかりません」

指示語でごまかすという、知ったかぶりの常套手段をされたって騙されたりしない。

「いわゆる卒業マジックだ」

「何がいわゆるですか。初めて聞きましたよ」

「卒業して一週間たってみな。清々するから。お前らは残酷なくらい未来しか見ていないからね。俺のことなんか即効忘れるよ。『せんせー私のこと忘れないでー』って泣きついておきながら、振り向きもしない。自分勝手か。さあ帰った帰った」

その後、私はおとなしく帰路についた。教室を出る際、寄り道すんなよと言って、背を向けた白衣のポケットに手を突っ込んで前を歩く先生の後ろ姿ほどことなく寂しく見えたのは、私の思い込みかもしれない。

視界がクリアになり、世界が色付いた。

気づいたら、さっきまで空の大部分を支配していた橙の層がずいぶんと細くなっていた。手先だけでなく、空気に晒されていた肌全体が冷えて感覚がなくなっている。それでも、私はベランダに立ったままでいた。

久しぶりに思い出した。先生にはあれ以来一度も会っていない。

あの時、自分でもよく分からなかった感情を、変に勘がいい先生は全部わかっていたのかもしれない。それとも、それは私が先生を買って被っているだけであって、何にも知らなかったのかもしれない。真相は確かめようがない。それにどっちだって構わない。

今ならあの時感じた感情が少しだけわかる。多分それは孤独・不安・切なさ・悲しみなどと名付けることが可能だ。けど、そう呼んだ瞬間に陳腐で安っぽいものに変わってしまうほど儂い。

例えば、友達と疎遠になること。卒業してからも仲良くしてねなどと、寄せ書きに書いても気休めにしかならない。文明の

利器があるといえ、物理的な距離の壁は厚い。次第に新しい環境で毎日顔を合わせる人が中心になる。私自身も中学時代の友達と会うことはほとんどない。

例えば、私の居場所がなくなる。私はこの学校に所属して、それはどんなに足掻いても覆すことはできない事実だ。自然にそこは私の居場所になった。名簿から私の名目が消えたら、学校は気安く訪れられることを拒む。部外者は出て行けとばかりにそびえ立つ。

例えば、やり残したことがある。三年間を廻りすると、後悔ばかりが目に見える。もつと真面目に行事に取り組んで思い出作りに励めばよかつたとか、恋人ができる前にあの人に告白すればよかつたとか、具体的なものもあれば、理由はないのに重大なことをし忘れた気がして焦燥感に駆られるなど、抽象的なものもある。

それでも、私は新しい世界の扉を開きたい。ささやかながらも叶えたい夢がある。そのためには、前に進むしかない。立ち止まっではいけないのだ。

それなのに、私はこの感情を持て余したまま足踏みを繰り返している。私の足元には足跡が重なっているはずだ。

「どうした？ 珍しく黄昏^{たそが}れて」

先生？ 慌てて振り返ると、クラスメイトの男子の姿があった。びっくりした。さっきの回想と同じように話しかけられた

から、一瞬タイムスリップしたかと思った。冗談じゃない。彼の声を私が聞き間違えるなんて。

彼は私の顔を見て面白そうに破顔した。

「ついに受験ノイローゼか？」

「違うし。それより私達もうすぐ卒業しちゃうよ」

「卒業か……そうだな」

彼は視線を巡らせた。その先にあるのは教室の後ろの黒板だった。「センター試験まであと一日！」と書かれている。

「いつの間にかセンターも終わっちゃったしな」

増えることのない数字に、私達は毎日急かされてきた。月日が流れるのは早いもので、もう明日からは自由登校だ。

「なんか寂しくない？ ずっと高校生でいたいわけじゃないけど、もう一生会わない人もいるんだよ……」

あの時と同じように話してみようとしたが、そこで私は言葉に詰まった。沈黙が二人を包む。あの時より言いたいことははっきりしているのに、何も言えない。

私はさよならを告げる前の空虚感が、寂しい。

卒業自体が寂しいのではない。その後に感じる喪失感を、今手に取るようにわかってしまうのがやるせないのだ。

地震に例えるなら、卒業式は主要動で卒業前は初期微動継続時間。今の時点でこんなにも心が揺れているだから、卒業式はどうなってしまうのだろう。

その後、私は卒業式翌日からやってくる思いがけない余波に、涙を流すのだろう。意味もなく卒業アルバムを開いて感傷

に浸ったり、友達とのくだらないやりとりで一人で思い出し笑いをしたり。高画質カメラ並に、細部にわたって想像ができるのに何もできない。

新しい何かと出会う度、こんな切なさで一生涯合っていかなきゃいけないなんて。重さで潰れてしまいそう。

喉まで出かかっているのに、あと一歩が足りない。成長してないな。水晶の化学的性質が言えることも、三角関数の合成が出来ることも、全然役に立たない。毎日気が遠くなるほど勉強しても、自分の気持ちすら伝えられない。

不器用な自分に悲しさを通り越して呆れ返ってきた。鼻の奥から生ぬるいものが込み上げてきそう、慌てて嘔り上げた。どうして、私は、こんなにも……。

「いいじゃん。そのままで」

一瞬息が止まった。私の思考がばれたのだろうか。冷や汗が背中を伝う。

「いくら別れが必然なものでもさ、寂しいものは寂しいし、悲しいものは悲しいじゃん。無理して平気なふりする必要なくなる？」

「……」

「あまり深く考えるなよ」

ふわり。頭に優しい重みを感じた。台詞と同時に軽く手の平を置かれた。先生に叩かれた場所と同じだ。そのまま彼は教室の中に入っていった。

去っていく彼の背中を見つめる。彼が視界から消えてから、先ほど触れられた場所をそっと撫でた。

もうひとつ、私を悩ますことがある。

私と彼の関係には名前がない。

確かに、一般的には「クラスメイト」と名付けることができるだろう。それは強力な言い訳だ。毎日顔を合わせる理由、話す理由、メールする理由、偶然を装って一緒に下校する理由、何から何までもお膳立てしてくれる。でも、卒業したら？

私は隣の県にある大学を受ける。彼の第一志望は関西方面の大学だ。ここは関東地方、十分遠距離と形容できる距離だ。

彼と会えなくなることは断言出来た。きっと連絡をとることすらしない。なぜなら私にそこまで出来る理由はないから。

「元」が付いてしまった関係は、離れた距離に太刀打ち出来ない。つまり元クラスメイトという繋がりは無意味だ。

だからその点においては名前がないも同然だと言えた。

そして弱虫の私は、受験を、卒業を、言い訳にして新しい名を望まない。

きっと、私は忘れてしまうだろう。

こんなに悩んでも、忙しい毎日に忙殺されて頭の隅においやられた思い出には埃が降り積もって見えなくなる。

傷ついてもかさぶたの下では新しい皮膚が作られ、荒れた大地には名もない花が芽生える。潮水をかぶった街だって少しずつ

つ再生している。

三年前の悲しみも記憶の雨に打たれてずいぶんと風化された。もしかしたら先生にはその辺が冷酷に映ったのかもしれない。想像したところで忘れてしまったことは事実なのだからどうしようもなかった。

大人になるってことは永遠を信じられなくなる事なのかもしれない。夕暮れまでが長く感じたあの頃。ずっと信じていられた無邪気な自分。今の私は、太陽は必ず沈み、そのあとには長くて暗い夜が来ることを知っている。そして夜もまた必ず明けけることも知っている。

扱いきれない切なさは忘れてしまえばいい。

しかし、荷物を落としながら走った先、私の手には何が残るのだろう。両手を広げてみたが、手の平のしわ以外に何も見えるはずがなかった。

色がついた水晶って売っているのかな？

雲の流れを見てふと思った。今の空のような藍色の水晶が欲しい。きっと綺麗だろうから。探してみよう。卒業したら。

いい加減寒くて風邪をひきそうだったので、そろそろ中に入ることにした。最後に、いつの間にか一番星が瞬き出していた空に向かって呟く。

早く卒業したいな。

口に出したはずの声は、背後から吹いてきた風に消されて私の耳には届かなかった。

ベリーショート賞『先取りノスタルジア』